

# 会計システム専門監査人部会 活動報告

システム監査学会  
会計システム専門監査人部会

発表者: 平塚康哲

2016年 6月 3日

**JSSA**

All Rights Reserved, Copyright Japan Society for Systems Audits 2016

# 会計システム専門監査人部会とは

会計システム専門監査人は、会計システムに関する専門知識を保有し、会計情報の不正等を指摘できる技量と知見を有する監査人として認定された事を示す資格です。これは、実務上、会計監査において、内部統制監査の支援をするため、IT統制上の観点から財務報告の適正性について監査人に意見を述べる事ができるという事になります。

5月時点で24名の登録があります。

これまでに、会計システム専門監査人が使用する目的で「会計システム監査実施ガイド」の作成、実践的な会計システムのシステム監査を行う事を目指し「SAP ERPの業務処理統制の実際的例の研究」における成果物の作成を行って来ました。

# 発表テーマ

部会活動報告

## 会計システム監査人とシステム監査

"Future roles of Certified Master Auditor for Accounting System on system audit"

発表者 平塚康哲

発表協力者 蒲池 孝一、黒田 康博、最首 克也、島田 洋之、藤田 登志夫

## テーマについて

会計システム専門監査人部会では、自らの知見を有効に利用した社会貢献について、模索しています。

昨年度の研究大会で、いくつかの今後自分達に対応をしなければならないだろうと考えられる事項を示しましたが、さらに、これからの活動として、何をすべきか、システム監査或はそれに関連する分野で、何ができるのか、しなければならないのかを探り、それらに関する勉強や研究を進める事を部会としての活動とする事を考えています。

それは、従来の専門監査人としての活動分野を広げる事も視野に入れ、常に変化する社会情勢を認識し、的確な貢献が出来る様にするという事になります。

# 会計システム専門監査人の特性

会計システム専門監査人は、専門分野という点からみると、世の中にある他の資格にない特性になっています。

現代社会では、デジタルビジネスの推進に向けて、企業・組織の中で、情報系がIT化の本流とも考えられていますが、企業の存続に不可欠な会計関連のシステムの重要性は今も変わりありません。

また、会計プロセスは、財務報告の信頼性を確保するため、会計情報が作成される過程において密接に関連する業務プロセスの有効なIT統制の下に成り立っています。

その意味では、会計システムの領域は企業全体であると考えられます。

会計システム専門監査人は、この様な範囲の広いシステム及び業務を対象とし、また、ネットワークやセキュリティ等IT技術の面に関しても、広い知見が必要となっています。

# 今後の会計システム専門監査人の役割を考える時の切り口

会計システム専門監査人部会では、下記のいくつかの切り口を以て、今後の社会での役割を考えています。

- (1) 世の中のシステム監査業務の変容
- (2) システム監査の必要性
- (3) 海外との差異
- (4) 会計監査業務におけるIT化の流れ・方向性
- (5) システム監査に対する長期的展望
- (6) 会計システム専門監査人資格のビジネスへの適用

以下に、部会員から集められた意見等を示します。

## “世の中のシステム監査業務の変容”について

- (1) 金融機関においてはITガバナンスが重要視され、金融庁からは、内部監査高度化が強く求められ、保険会社の内部監査部門に対する具体的な監督指針が出されている。  
「監査を可視化する、科学する」という事が必要。
- (2) クラウド会計システムが多様化し、それに対し、どの様な監査が必要になるのか。
- (3) 従来のシステム監査の目的に沿った手続きを踏むのが理想的。一方で、クラウド化など世の中の変化に対応した監査が必要であり、AI技術の使用も視野に入ってきた。
- (4) サイバー攻撃の脅威が高まって来た事で、技術面も含めた総合的見地での評価作業が増えている。
- (5) 情報技術の利用のあり方が変化してきていて、利用或は管理のあり方を判断しなければならなくなった。
- (6) 監査の手法を業務に生かす機会が増えた。

## “システム監査の必要性”について

- (1) システムへの依存度が高くなって来ており、経営者の関与が求められ、その為のシステム監査の必要性は高まっている。
- (2) システムに統制を委ねている事項が増えており、ますます必要になる。
- (3) システム監査の重要性は認識され、実施する事業体は増加しているが、実施形態としては、監査法人による会計監査の一環で行われているのが実情。
- (4) ITはなくてはならないものとなっており、完全性、信頼性を確保する上で要求は大きくなっている。また、マイナンバー制度関連でも増加すると考えられる。
- (5) システム監査の存在が知られていない為、結果として、その他の監査の枠組みで行われており、独自のニーズはないかもしれない。
- (6) 大きなシステムトラブルが社会問題になって来ており、システム監査という形だけではなく、外部からアドバイスを受ける事がある。



## “海外との差異”について

- (1) 日本特有の制度からグローバルスタンダードへの転換が始まっている。監査委員会と内部監査部門との連携が重要になってくる。
- (2) 日本では、内部の監査人が実施する事が効果的と考えられているが、米国等では、外部委託が抵抗なく割り切って考えられている。
- (3) 米国では、技術的検証を広く適用し、客観的な証拠収集を行っているが、日本では限定的で、間接証拠や監査人の主観の範囲に留まる。
- (4) 海外(欧米以外も含め)では、システム監査の有資格者が増えている傾向がある。日本では、技術面のみを対象にされ、人的な面は余り見られていない。

## “会計監査業務におけるIT化の流れ・方向性”について

- (1) CAATは活用段階になって来ているが、主には通例的な面で利用されるのが良く、人による発見も取り入れ、監査の高度化に期待。
- (2) CAATでカバーできない領域もある。広範囲な電子商取引など、どこまでの深度でITレビューをすべきか、不安がある。
- (3) AI化も、夢物語ではないかもしれない。
- (4) デジタルフォレンジックの活用は有効である。
- (5) 監査データの収集に関するISO化の動きもあり、将来的に企業への義務化があるかもしれない。
- (6) 内部統制管理にIT化の動きがある。デジタル化されたデータが活用されるようになるのは良い方向である。

## “システム監査に対する長期的展望”について

- (1) 川下の問題発生への対応ではなく、経営体制の不備、経営の認識・対応脆弱性等川上に踏込んだ監査が求められる。
- (2) AIで不正が見抜けるかどうか。
- (3) 企業価値の向上に向けて、有効性の監査に軸足を移していくべきである。
- (4) データセンター利用増加で、一般企業での監査は、利用者としての監査が主流になると考えられ、技術的な専門性を元に、組織的、人的対策を評価で安全性を保証する監査が増える。
- (5) 「システム監査」が独自の地位を打ち出せないと、認知されない。一方で、概念という意味では、システム監査領域のボリュームが増大する。
- (6) システム監査の人材育成が必要。

## “会計システム専門監査人資格のビジネスへの適用” について

- (1) 会計システム専門監査人は、スペシャリストとゼネラリストを兼ね備えた振る舞いができるようになるべき。
- (2) 実際の監査における助言をできる組織として存在してほしい。
- (3) 制度変更、ビジネスのデジタル化、基幹システムのクラウド化などの流れに対応した監査ができる事があるべき姿。
- (4) 不正が経営者によるものであった場合、それをITにより解明できる様になれば良い。
- (5) 会計システム専門監査人は、それぞれの力量で活動し、それぞれの現場で力を尽くす事が良い。
- (6) システム監査に限定する事なく、領域を広げていく事を考える。

## “会計システム監査人とシステム監査”のまとめ

当部会では、テーマである「会計システム監査人とシステム監査」に対して、現時点で何等か確定的な事を、結論という形で示す事は出来ないと考えました。

その理由の大きなものとしては、会計システムに対するシステム監査の実態、或はあるべき姿が十分に把握できていないという点です。

知らない、分からない事が多いという事が認識されたという事であり、まず現状の把握を行う事が必要であると考えています。

## “会計システム監査人とシステム監査”のまとめ

部会活動として、上記で示された各事項について、調査、研究を行い、来年度の大会での発表を目標に活動する事とします。

併せて、様々なテーマでの勉強会(相互情報交換会)を開催致します。

# 会計システム専門監査人部会 活動報告

ご清聴ありがとうございました

システム監査学会  
会計システム専門監査人部会